筑波学院大学紀要第13集　153 ～ 163 ページ　　2018年

効率的に初級日本語学習者のコミュニケーション能力を育成するコースデザイン

加藤　稔人*

A Course Design That Develops Communication Skills of Beginning Japanese Learners Efficiently

Toshihito Kato *

抄　録

本稿では、まずオーストラリアを中心に行われてきた具体的な接触場面を想定し、それをコースの到達目標としてシラバスの中に組み込んだコースデザインについて触れる。次に台湾の中華大学で筆者がデザインし、運営してきた日本語専攻の１年生を対象とした会話コースを紹介する。中華大学では2008年より１年生向けの会話の授業においても教室に日本人ゲストを招いて、学生が日本語でコミュニケーションをするビジターセッション（VS）を毎年実施してきている。日本語の実際使用場面をそのままコースの到達目標として、授業でそのような場面を想定した会話練習を行い、試験でも同じ内容のロールプレイを行うことで、現実的かつ実用的な場面での日本語運用能力を効率的かつ効果的に身につけることができる。

キーワード：コミュニケーション能力、コースデザイン、接触場面、実際使用、ビジターセッション（VS）

Abstract

The major objective of this article is to introduce a Japanese language course, designed and implemented by the author, that focuses on learner-native speaker contact situations. Firstly, it argues Japanese language courses that have been popular in Australia: learner-native speaker contact situations are set as goals of the course and included within a syllabus. Secondly, it introduces a conversation course for first year students of Japanese major at CHU. Visitor Sessions (VS), in which Japanese guests are invited to the classrooms and communicate with the students in Japanese, for first year students have been held at CHU since 2008. By setting situations of Japanese in real use as goals of the course, and practicing conversations in the classroom assuming such situations, students are able to develop their communication skills of Japanese in realistic and practical situations efficiently and effectively.

Key words: communication skill, course design, contact situation, real use, visitor session (VS)

＊　中華大学、Chung hua University

1．はじめに

日本語学習は第二言語としての日本語学習（JSL）と外国語としての日本語学習（JFL）の二種類に分類が可能である。前者は日本国内の大学や語学学校など、日常生活で 日本語を聞いたり、話したりする環境の中で日本語を勉強することである。一方、後者は日本国外の大学や語学学校など、教室以外においては自然の状況で日本語に接する機会は殆どない環境下で日本語を学ぶことである。JSLにおいては学習者は教室外で多くの日本語のインプットやアウトプットの機会があるため、教室ではむしろ読み書きや文法の練習なども重要となってくるかもしれない。しかし、JFLで読み書きや文法中心、或いは日本語能力試験のための授業を行っていては、学習者はコミュニケーション能力を伸ばすことができない。

台湾の高校、大学、語学学校などにおける大部分の日本語教師は学習者を日本語能力試験に合格させることを主要な目的とし、授業では少しでも多くの文法と単語を暗記させようとしているが、「話す」「書く」という技能を全く問われない日本語能力試験で最高レベルのN1に合格しても、実際場面で日本人と流暢かつ適切なコミュニケーションができたり、適切なEメールなどが書ける保証は全くない。実際、台湾の大学の日本語学科で4年間日本語を専攻したにもかかわらず、日本人と挨拶以上の会話ができないという学生は珍しくない。

筆者は同じJFLであるオーストラリアの複数の大学で6年間日本語を教えた経験を基に、台湾の中華大学に専任教師として赴任した直後から、オーストラリアで主流となっていた、実際場面で日本人と適切なコミュニケーションができることを到達目標とした日本語コースをデザインし運営してきた。

これらをふまえて、本稿ではまず第2節でコミュニケーション能力を養うためのコースデザインについてオーストラリアでの実践例を基に述べ、第3節で筆者がデザインし、運営してきた中華大学での日本語専攻の1年生を対象とした会話コースを紹介する。そして、最後に第4節で台湾国内で学ぶ初級学習者がより効率的かつ効果的に日本人とコミュニケーションできるようになるための提言を行う。

2．接触場面と実際使用

接触場面とは母語話者同士の接触ではなく、外国人が参与し母語話者と接触をもつ場面のことであり、フォリナートークに代表されるように母語話者の言語行動は母語話者同士の場面と接触場面とでは異なる（鎌田2003）。また、大部分の学習者は母語話者と同等のコミュニケーション能力を習得できないため、限られた能力の中でコミュニケーションを行わなければならない（永山他2006）。そこで、従来のように母語話者同士の会話をモデルとして、それと同じ会話ができるようになることを目標とするのは現実的ではない。つまり、具体的な接触場面において学習者がコミュニケーションを行えるようになることを目標にしてシラバスや教材を作成する必要がある（ネウストプニー 1991、永山他2006）。

日本国内で日本語を学習している場合は接触場面は無数に存在すると言ってもよい。日常生活そのものの多くが接触場面になるだろう。しかし、日本国外で日本語を学習する場合は、自然の接触場面というものは非常に限られている場合が多く、積極的に接触場面を探したり、自ら作ったりする必要がある。例えば、オーストラリアのシドニーやメルボルンなどの都市部では日系企業の駐在員とその家族、ワーキングホリデーの若者、永住者の他、旅行者などの日本人へのアクセス

が可能で、モナッシュ大学やメルボルン大学、ニューサウスウェールズ大学をはじめとする、オーストラリアのいくつかの大学ではこれらの現地の日本人を人的リソースとして有効に活用し、学習者に接触場面を提供してきている（ネウストプニー 1991；村岡1992；トムソン1997；トムソン・舛見蘇1999）。

どうして学習者に日本人との接触場面、つまり日本語の実際使用場面を与える必要があるかというと、教室でのドリルやロールプレイは完璧にできても、実際使用場面に直面すると多くの制約に圧倒されて同じことができなくなるからである（ネウストプニー 1991）。ロールプレイ[1]のような擬似コミュニケーションの利点はその安全性にあり、学習者はその中で起こった誤解や不適切な言語行動は何ら実害を及ぼさないことを知っているので、安心して活動を行える。一方、現実社会で行われるコミュニケーションには危険が伴い、相手の信用を失ったり、相手に悪い印象を与えてしまう可能性もある（尾崎 2006）。しかし、尾崎（2006）の言葉を借りると、擬似コミュニケーションは「畳の上の水練」と同じで、いくら畳の上で上手に泳いでいる自分のイメージを作っても、実際に水の抵抗を受けながら息継ぎをしていく技術を獲得することは絶対にできない。

このため、日本人との接触場面を直接シラバスの中に導入し、これを到達目標として実際のコミュニケーションに臨む前に十分な準備や練習を行う必要がある（村岡1992；トムソン1997、横須賀2003、尾崎2006）。学習者に接触場面を与える実際使用の活動には、街頭インタビュー、家庭訪問、ホームステイ、ビジター・セッション（以下VS）などがあるが、VSは教室内での活動のため、学習者とゲストの言動を観察しやすく、他の実際使用活動に比べると比較的運営しやすい。

VSとは教室に教師以外の母語話者を招き、真のコミュニケーションの中で学習者に言語を使用させる活動であるが、初級から上級まで適用が可能で、コース全体の目的に合わせた言語の練習や使用も調整しやすい。VSの有効性の一つはそのコミュニケーションの自然さにある。対話者が教師以外の母語話者であること、談話構造がいわゆる教科書にでてくる不自然な日本語ではないということ以外にも、相手の話す日本語が聞き取れない、自分の言いたいことを日本語で言えないなどのコミュニケーション上の問題を実際に経験するからである（永山他　2006）。逆に言えば、VSを行う前にこのようなコミュニケーション上の問題に対応するためのストラテジーも十分に教えておく必要がある。具体的には話し手として（a）相手の理解を確認する、（b）フィラーを使用して発言権を保持する、（c）言い方がわからない時に相手に聞くなどの技能を挙げている。また、聞き手としては（d）あいづち、（e）わからないことを聞き返す、（f）自分の理解状態（わかる／わからない）を伝える、（g）自分の理解、解釈を提示して確認するなどである。

VSのもう一つの有効性は学習動機の向上にある。同じ会話練習であっても、VSという具体的かつ明確な目標を学習者に与えることによって、学習動機を格段に向上できる。また、試験以外にいつ実際場面で使うかわからない文型や単語を覚えるより、近い将来に日本人に対して使うことがわかっている文型や単語[2]を練習する方が現実味があって学習効果が上がることは想像に難くないだろう。そして、事前に練習してきた話題での会話やストラテジーの使用に成功し、その結果として言語習得にもつながったことなどが、学習者自身の肯定的評価につながり、学習の動機付けを更に高めていることが報告されている（村岡1992）。

ただし、注意しなければならないのは、特にVSの準備をしないで、または準備が不十分な段階で教師以外の日本人と対話を行った

場合、コミュニケーションに失敗して、逆に自信を喪失してしまう場合もある。接触場面を想定したコースデザインでは実際使用場面のみならず、その準備過程も非常に重要となる。このため、まずその特定のゲスト達と話す話題を想定して、その話題について話すのに必要な文法や語彙に加え、礼儀作法、マナーなどもシラバスに組み込み、学習者に入念な準備と練習をさせる必要がある。

3．一年生の会話の授業におけるコースデザイン

JFL と呼ばれる日本国外における日本語学習では、一般的に学習者が練習ではなく実際に母語話者と日本語でコミュニケーションをする接触場面は限られている。しかし、台湾では台北などの大都市を中心に観光名所や有名なレストラン、ビジネス街、サイエンスパークなどに行けば多くの日本人観光客や駐在員、出張者などがいて、その気になれば接触場面を作ることもそれほど難しくない。中華大学も新竹市の山上に位置し、大学の周辺には教師以外の日本人はいないが、2007年より日本の姉妹校の一つである筑波学院大学の短期研修生が毎年12月に中華大学を訪問してくれるようになり、これらの日本人学生との定期的な接触場面が想定できるようになった。また、2009年からは別の姉妹校である山陽学園大学の教育実習生が、2013年からは第三の姉妹校である宮城教育大学の短期研修団が来てくれるようになった。そして、VS で教室に招く日本人ゲストが姉妹校の学生だけでは足りない場合は、筆者の知り合いの日本人やインターネットの掲示板などで台湾在住の日本人や観光で台湾に来ている日本人を募集して教室に来てもらうこともある。

これらのことから、中華大学応用日本語学科における会話の授業は大学の日本人教師との接触場面以外に、これらの姉妹校の学生や教員など、大学を訪問してくれた日本人との接触場面で流暢かつ適切なコミュニケーションができることを到達目標としてデザインしている。

毎年前期に開講している「日語会話（一）」（１年生必修）、「日語会話（三）」（２年生必修）、「日語会話（五）」（３年生必修）の３つのコースはそれぞれシラバスを構成するトピックや機能は異なるが、想定する接触場面は全て12月に大学を訪問する日本人ゲストとの交流である。以下では日語会話（一）に絞って紹介する。

日語会話（一）は日本語専攻の１年生前期（９月～１月）の必修科目である。100学年度（2011年度）より毎年約100名の１年生が在籍しているため、これを４クラスに分け、それぞれ異なる日本人教師が担当しているが、４クラスとも共通の到達目標の下に、同じオリジナル教材[3)] を使用して授業を行い、同一の試験を行う。高校の授業や独学などで日本語を少し勉強したことのある学生もいるが、受講生の多くはゼロスタートの学生である。日語会話（一）では毎週100分×2回の計200分という限られた練習時間で初対面の日本人とできるだけ自然なコミュニケーションができるように、トピック・シラバスを採用している。

そして、12月初旬の VS で日本人ゲストと対談するために有用なトピックを選び、それらの話題での会話練習を集中的に行う。VS は例年、開講から第13～14週目（約３ヶ月後）に行っているが、国民の祝日や中間試験に要する時間などを除くと、実際に教室で準備できる授業時間は約36～40時間である。このコースでは授業で使用する PPT やモデル会話、過去の中間・期末試験などの音声ファイルを E-Campus と呼ばれる大学のオンライン学習サイトにアップロードして、自主学習を促しているが特に宿題は課していない。コースの到達目標（goals）は以下の２つである。

①中華大学を訪問した姉妹校の教員や学生、その他の日本人ゲストと流暢かつ適切なコミュニケーションができる。
②中華大学の日本人教師と流暢かつ適切なコミュニケーションができる。

104学年度（2015年度）日語会話（一）のコーススケジュールを表１に示す。まず、第１週と第２週は平仮名、片仮名の確認をしながら挨拶や（スピーチ形式の短い）自己紹介、数字、値段、時間、日付、曜日などが言えるようにする。

第３週からが本格的なVSの準備となるが、まず過去のVSのビデオを見せてVSとはどのようなものか、そして12月までにどのような準備をしていけばよいかなどを確認する。最初の練習項目である「自己紹介」は対話型の自己紹介で、自分の名前と出身などを言ってから、姉妹校の日本人学生に名前や専攻、出身などを聞く。

ここでは、聞いた内容を確認するストラテジー（「～ですね？」）や聞き返し（「すみませんが、もう一度お願いします」）、漢字を聞くストラテジー（「すみませんが、漢字ではどう書きますか？」）、相槌（「そうですか」）の練習などを行う。このようにして、初対面の日本人とスムーズに自己紹介をすすめ、相手の回答がよく聞き取れなかった場合でも対応できるようにする。

第５週からの「台湾観光」では台湾を訪問中の姉妹校の日本人学生に台湾で行った所、食べたり飲んだりしたものを聞く練習をする。そのために、台湾の主要都市や有名な観光地、台湾料理、飲み物の名前などと、「～に行きましたか」「～を食べましたか」「～を飲みましたか」などの動詞の過去形を使った会話を練習する。

また、それらの感想を聞くために「～はどうですか？」という言い方と、「きれい」「にぎやか」「おいしい」「大きい」などの形容詞も導入する。相槌に関しては、相手から新しい情報を得た場合の「そうですか↓」と相手の発言に同意を示す「そうですね」、反対意見を示す「そうですか↑」の使い分けなども練習する。

第７週からの「趣味」では好きな映画（俳優）や音楽（歌手）、スポーツ（選手）、テレビ番組、お酒などについて話すため、「～が好きです」という文型と映画や音楽のジャンル、スポーツやお酒の名前なども練習する。また、相手が知らない歌手や俳優の名前を挙げてもパニックにならずに、漢字を聞くストラテジーや「ちょっとわかりません」と聞き流すストラテジーなども練習する。

第９週の中間試験は日本人教師が姉妹校から来た日本人学生の役を演じて、これまで練習してきた「（対話型）自己紹介」「台湾観光」「趣味」の３つのトピックを一連の会話の中で一対一のロールプレイを行なう。ロールプレイの評価は（１）それぞれのタスクの達成度、（２）流暢さ、（３）文法･語彙の正確さ、（４）発音･イントネーションの正確さ、（５）ストラテジーの使用という５項目をそれぞれ５段階で評価する。

このような会話の試験を評価するにあたって最も難しいのは、ロールプレイの採点基準を各クラス間で統一することである。会話の試験では同じ学習者の同じロールプレイを聴いても、教師Aは80点、教師Bは70点、教師Cは90点、教師Dは85点をつけるようなことも珍しくない。このため、ルーブリック（評価表）の五段階のそれぞれのレベルの記述をできるだけ具体的で客観的にして、採点者間の基準の差を最小限に抑えるようにしている。

ただし、それだけでは採点者間の基準は同じにならないため、コースのコーディネーターである筆者が毎回の試験後できるだけ早く、上位２名の試験を録音した音声ファイルと採点例（項目別の点数とそのような点数に

表１　104 学年度日語会話（一）コーススケジュール

週	日付	トピック	各授業の目標
第１週	9/14	コース紹介 自己紹介 平仮名１	●コースの目的と目標を理解する ●日本語で簡単な自己紹介ができる ●平仮名（あ～ん）が読める
	9/18	値段	●日本語の数字と値段を言える
第２週	9/21	時間 平仮名２	●日本語で時間を言える ●平仮名（濁音、半濁音、拗音）が読める
	9/25	日付 曜日 片仮名	●友達とお互いの誕生日を話せる ●片仮名（ア～ン）が読める ●曜日を言える
第３週	9/28	中秋節代休	
	10/2	自己紹介１	●初対面の日本人大学生に対して、名前と出身地、専攻を聞くことができる
第４週	10/5	自己紹介２	●相手の回答に対して確認、聞き取りにくい場合は、聞き返しができる
	10/9	國慶日代休	
第５週	10/12	自己紹介２	●相手の回答に対して、適切に相槌ができる
	10/16	台湾観光	●台湾を訪問中の日本人に台湾で行った所と食べた物、飲んだ物、それらの感想を聞くことができる
第６週	10/19		
	10/23		
第７週	10/26	趣味	●初対面の日本人とお互いの趣味や好きな物事を話し合うことができる ●趣味や好きな活動の頻度を言える
	10/30		
第８週	11/2		
	11/6	総合練習 （試験準備）	●初対面の日本人と自己紹介をして、台湾で行った所、食べた物、飲んだ物、それらの感想などを聞くことができる ●初対面の日本人とお互いの趣味を話せる
第９週	11/9	中間試験	
	11/13		
第10週	11/16	出身地	●日本と台湾の主要都市や地方名を言える ●初対面の日本人に出身地を聞いて、それが日本のどこにあるのか、その都市や県の有名な物などを聞くことができる ●自分の出身地が台湾のどこにあるのか、その地域の有名な物などを話せる
	11/20		
第11週	11/23	海外旅行	●初対面の日本人と行ったことがある国、都市、観光地、そこでしたこと、それらの感想などについて話すことができる
	11/27		
第12週	11/30	毎日の生活	●日本人教師に毎日の生活習慣について話すことができる
	12/4		
第13週	12/7	交流会 リハーサル	●グループメンバーと協力して交流会の準備をする ●交流会で日本人ゲストと会話を続けるコツを理解する
	12/11	ビジター セッション （交流会）	●初対面の日本人と自己紹介をして、台湾で行った所、食べた物、その感想を聞ける ●初対面の日本人とお互いの趣味を話せる ●日本人とお互いの出身地について話せる ●日本人と海外旅行の経験について話せる
第14週	12/14	クリスマスにしたこと 大晦日、元旦、冬休みの予定	●日本人教師に週末（過去）にしたことと、その感想を話すことができる ●日本人教師にクリスマス、大晦日、元旦、冬休み（未来）の予定を話すことができる ●出来事を詳細に（どこで（へ）、誰と、何を、どんな交通手段で）話すことができる
	12/18		
第15週	12/21		
	12/25	総合練習 （試験準備）	●日本人教師にクリスマスイブにしたこととその感想を話せる ●日本人教師に大晦日、元旦、冬休みの予定を話すことができる ●日本人教師に毎日の生活習慣について話すことができる
第16週	12/28	期末試験 A	
第17週	1/4	総合練習 （試験準備）	●初対面の日本人に自己紹介ができる ●初対面の日本人に出身地を聞いて、その都市や県について聞くことができる ●自分の出身地について話すことができる ●初対面の日本人と海外旅行の経験とそれらの感想などについて話すことができる
	1/8		
第18週	1/11	期末試験 B	

なった理由）をＥメールで各クラスの担当教師に送る。そして、各クラスの先生にも採点終了後は同様にコース内の全ての先生に上位２名の音声ファイルと採点結果（合計点数だけではなく、項目別にそのような点数になった理由も）を送ってもらい、コーディネーターである筆者が聴いてチェックをしている。コーディネーターの示した基準から大きく外れている場合などは採点をやり直してもらうこともある。問題なければ、各クラスの最高点、最低点、平均点なども報告してもらう。

このように、コーディネーターが事前に標準となるべき採点基準を示さなければ、コース内の各担当教師はそれぞれ独自の基準で採点することとなり、甘い採点をする教師と厳しい採点をする教師の差を縮めることができない。実際、このような会話試験を導入したばかりで、クラス間での評価基準の標準化が手探り状態であった頃には、学生から自分のクラスの先生は他のクラスの先生より採点が厳しいという不満の声が出たこともある。

104学年度日語会話（一）の中間試験の各クラスの最高点、最低点、平均点を表２に示す。上述のように４クラスの評価基準をできるだけ標準化しても、クラスによって真面目で優秀な学生が多いクラスもあれば、試験の準備をあまりしてこない学生が多いクラスもあるため、最高点や平均点はクラスによって当然異なる。

通常、日語会話（一）の中間試験は、大学に入学して初めての試験であると同時に、多くの学生にとっては生まれて初めての外国語の口頭試験であるため、大部分の学生は一生懸命に準備をしてくる。その結果、平均点は80点前後になることが多いが、乙Ａクラスでは授業をよく欠席していた数名の学生がロールプレイで殆ど何も言えず、20-30点をとったため、クラスの平均点も70点未満となった。

表２　104学年度日語会話（一）中間試験結果

	甲Ａクラス	甲Ｂクラス	乙Ａクラス	乙Ｂクラス
最高点	89	94	91	97
最低点	45	47	22	51
平均点	77.8 （33名）	79.7 （32名）	69.9 （27名）	80.8 （26名）

第10週の「出身地」では相手に出身地を聞き、それが日本のどの地方にあるのか、その都市や県の有名なものなどを聞き、自分の出身地についても説明する。このため、「～は～にあります」という文型とともに、日本と台湾の主要都市や地方名（関東、関西、東北、九州；北部、中部、南部等）なども言えるようにする。

第11週の「旅行の経験」ではこれまでに行った国や都市、そこでしたこと、その感想などについて聞く。このため、「～たことがありますか」という経験を話す文型と、世界の主要各国や都市、観光地の名前の他、「おいしかったです」「きれいでした」などの形容詞の過去形も使って会話練習を行う。

そして、第13週のVS直前の授業では、VSの注意事項を話し、実際に学生をグループに分けて、教師が日本人ゲストの役を演じながらリハーサルを行う。失礼な態度や言い方などがあれば注意をしたり、グループでスムーズに会話を進めるコツなどをフィードバックする。具体的には授業で練習してきた話題の中で学生の方から積極的に質問し、できるだけそれらの話題を発展させるようにする。なぜなら、１年生の文法・語彙知識は限られているため、自分たちが対応できる話題で会話が進むように会話の主導権を握り、会話内容をコントロールする必要があるためである[4)]。日本人ゲストが主導でいろいろな質問をした場合、３年生であれば問題は少ないが、日本語学習を始めて３ヶ月の１年生には聴き取れない可能性が高い。

それに加えて、できるだけグループの全員

が各話題の中で発言するように指導する。例えば、音楽の話題であれば日本人ゲストに好きな音楽のジャンルと歌手を聞くだけで終わるのではなく、グループメンバーが一人ずつ自分の好きな音楽の種類と歌手を話していく。それぞれの話題の中で全員が会話に参加していけば、会話を発展させることができる可能性も高くなる。そして、少なくとも警察の職務質問のような一問一答の形式は避けることができる。

同週のVSでは４～５人の学生でグループをつくり、１人の日本人ゲストと約25分ずつ４人のゲストと対談する。１年生の授業の中でのVSは2008年より毎年行ってきているが、大部分のグループは４人の日本人ゲストと楽しそうに歓談し、計100分にわたるVSの中で会話が途切れることは殆どない。しかし、リハーサルで会話の発展のさせ方を練習したにもかかわらず、本番では焦って一問一答に近い形式になってしまい、話題をあまり発展できず、質問がなくなってしまうグループもないわけではない。また、ゲストに「一つの中国問題」や「ひまわり学生運動」に関する意見などのような難しい質問をされて沈黙してしまったグループも過去にあった。

このような問題に気が付けば、教師が再度、授業で練習した話題を提供して、グループ全員が会話に参加するように促したり、ゲストに改めて学生の質問に答える形式でお願いしたいことを伝えれば、会話を継続できる場合も多い。このため、教師はVSの間、沈黙したり、台湾人学生だけで話したり、教師に助けを求めているグループがないか、などを観察している。それに、沈黙してしまうケースの多くはゲストが静かで、口数が少ないことも原因の一つであるため、ローテーションで違うゲストとの対話になれば、25分間問題なく会話が続くことも多い。

話題を限定して日本人と会話ができても、それは「本当の実力」ではないのかもしれない。しかし、初対面の日本人と話題を選ばずに何でも話せる実力をつけるためには、教室でのドリルやロールプレイだけでは不十分であり、実際に日本人と面と向かってコミュニケーションする経験が不可欠である。また、十分な文法と語彙の知識を身に付けてから日本人とコミュニケーションさせるというのでは、何年先になるかわからないし、それまで日本語学習へのモティベーションが維持できている保証は全くない。

第14週は前週のVSの反省会を行う。（１）VSはどうだったか？（２）VSで上手くできたこと、（３）上手くできなかったこと、（４）次回のVSまでにどうしたいか、などについて筆者のクラスでは中国語で各グループに答えさせている。（１）どうだったか、という感想に関しては、「緊張したが、楽しかった」「日本人学生とLINEを交換できてよかった」「またやりたい」などの肯定的なものが圧倒的に多かった。

また、（２）できたことに関しては、100分間日本語で話し続けたことに対する充実感、達成感や自分の話す日本語を日本人が理解してくれたことに対しての満足感を話す学生が多かった。そして、（３）できなかったことに関しては、「日本人学生の話す日本語が人によって聴き取りやすい場合と、聴き取りにくい場合[5)]があることがわかり、後者とは会話を続けるのが難しかった」という学生がいた。また、別の学生は「準備していた質問を全部聞き終わってしまい、何を話したらいいかわからなかった」、「授業で練習したトピックから話題がそれると、日本人学生が話す内容が聴き取りにくくなくなるし、自分も話せなくなる」ということを指摘した。

しかし、実際にはこれらの問題はVS中に教師が発見して、授業で練習した「聞き返し」や「漢字で書いてもらう」等のコミュニケーションストラテジーを使うように促したり、一問一答ではなく、できるだけグループのメ

ンバー全員が一つの話題の中で発言をして、それぞれの話題を発展させるように教師が再度促したところ対話を続けることができた。

そして、（4）次回のVSまでにどうしたいかという問いには、「もっと文法と単語をたくさん勉強しなければいけない」「日本人の話す自然なスピードに慣れなければいけない」「日本語で話せるトピックをもっと増やしたい」などと回答した。

反省会の後、第14～15週は毎日の生活習慣やクリスマスにしたこと、大晦日と元旦、冬休みの予定などを話す練習をし、第16週の期末試験Aに備える。期末試験Aは日本人の担任教師（導師）が学生と一対一で面談を行うという場面設定で、中間試験とは逆に日本人教師の方から上記の話題に関する質問をし、学生がそれに答える形式となる。

12月の最終週に行う期末試験Aの最大のポイントは学生が実際に（クリスマスイブ、クリスマスに）行ったところ、やったこと、（大晦日、元旦、冬休み）に行く予定の所、する予定のことを詳しく（どこで、誰と、何を）話したり、自身の生活習慣（何時に起きて、朝ごはんに何を食べて、放課後はどこで、何をする等）や出身地について答える点である。このように、期末試験Aは大学の日本人教師に対して、自分自身の日常生活について日本語で話すというタスクである。

第17週は翌週の期末試験Bの準備を行うが、内容は「（対話型の）自己紹介」と「台湾で行った所／食べた物」に加えて、第10週～第12週に練習した「出身地」と「海外旅行の経験」について姉妹校の日本人学生に扮した日本人教師に聞くというロールプレイである。

このように中間試験と期末試験Bの内容は全て第14週のVSで話す内容と同じで、試験のために練習、準備していけばVSにも対応できるようになる。また、期末試験Aは大学の日本人教師の研究室に適切に入室して、面談を受けて（日常生活に関する質問に答える）適切に退室するというもので、これも同様に試験のために練習していれば授業以外の時間に日本人教師とスムーズなコミュニケーションができるようにデザインされている。

このように日本語の実際使用場面をそのままコースの到達目標として、授業でそのような場面を想定した会話練習を行い、試験でも同じ内容のロールプレイを行うことで、現実的かつ実用的な場面での日本語運用能力を効率的かつ効果的に身につけることができる。

4．おわりに

オーストラリアの日本語教育界では1970年代に接触場面の概念が生まれ、日本語の実際使用活動が数多く行われてきたが、台湾の中華大学でも筆者が赴任した2007年より毎年会話の授業の中でVSを実践してきている。また、1年生が対象のVSも2008年から毎年実施しており、学習開始3ヶ月前後でも教室に招かれた日本人ゲストと限られた話題の中で十分に対談できることを示してきた。

実際使用活動の目的は、練習では経験することのない緊張感やVSの当日や反省会に関する記述で紹介したようなコミュニケーション上の問題、それらを解決した成功体験などを初級段階からさせて、日本語でコミュニケーションする楽しさを味わってもらいながら、自信をつけさせることにある。しかし、このような日本語の実際使用活動は、ただ教室に日本人を連れてきたりするだけでは効果は非常に限られる。準備もなしに突然教室に日本人を連れてきたような場合は、日本人と会話ができず、学習者は逆に自信を失ってしまう場合もある。

重要なのは日本人との具体的な接触場面におけるコミュニケーションをまずコースの到達目標として、シラバスにもそれを組み込

み、そのために授業の中で入念な練習と準備を行うことである。それに加えて、中間や期末試験などでも到達目標となっている接触場面と同じ設定でのロールプレイを課すことで、更に効果は増す。

構造シラバスの教科書で簡単なものから複雑なものへと、いつ実際場面で使うかわからない文型や単語を順に積み上げていくのは、能力試験のための準備としてはよいのかもしれないが、日本語の実際使用という観点では非常に効率が悪い。効率的かつ効果的に初級学習者の日本語のコミュニケーション能力を育成するためには、その学習者が近い将来日本人に対して使用することがわかっている、或いは日本人に対して使用する可能性が高い文型や単語から優先的に教えていく必要がある。

シラバスにVSを組み込むことで、日本語の実際使用の機会を学習者に提供できるだけではなく、コースの到達目標がより明確となり、学習者の学習動機にもよい影響を与えることができる。このような日本語の実際使用場面を想定したコースデザインは日本語専攻だけではなく、第二外国語などのような学習期間が短い日本語コースにも非常に有効である。台湾国内をはじめとする、世界で日本語を学ぶ初級学習者がより効率的かつ効果的に日本人とコミュニケーションできるようになることを祈る。

注

1）ここではロールプレイが必要ないということではなく、ロールプレイだけで終わっては効果が薄いということを述べている。ロールプレイは実際使用ではないが、実際使用の前に行う練習としては重要かつ必要な過程である。

2）VSで日本人ゲストと対話するのに必要となる文型や単語のことを指す。

3）コースの到達目標を効率よく達成するため、市販の教科書ではなく、筆者が作成・編集した教材を冊子にして使用している。冊子には「対話型自己紹介」「台湾観光」「趣味」「出身地」など授業で扱う話題の会話を練習するための教材やモデル会話、中間・期末試験のタスク表、評価表などが入っている。

4）VSの前に日本人ゲストを集めて教師の方から、交流相手は学習開始後3ヶ月の初級学習者であるため、できるだけ学生からの質問に答える形式でお願いしたいこと、但し過度にゆっくり、簡略化した話し方はする必要がないことなどを伝える。

5）話すスピードも関係があったかもしれないが、主な原因は「です / ます」で質問する学生に対して、「です / ます」を使って丁寧に回答した場合は聴き取りやすく、友達言葉で話した場合は聴き取りにくかったことが考えられる。

参考文献

尾崎明人(2006)「コミュニケーション能力の育成」，国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈：学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』，アルク，pp.196-220.

鎌田　修（2003）「接触場面の教材化」，宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育：ネウストプニーのインパクト』，明治書院，pp.353-370.

トムソン木下千尋（1997）「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』7号，pp.17-29.

トムソン木下千尋・舛見蘇弘美（1999）「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者：その問題点と教師の役割」『世界の日本語教育』9号，pp.15-28.

永山友子・武田　誠・福永由佳・土井真美（2006）「接触場面の実態を反映した日本語教育に向けて」，国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈：学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』，アルク，pp.142-171.

ネウストプニー，J.V.（1991）「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育』1号，pp.1-14.

村岡英裕（1992）「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について：ビジターセッション場面の分析」『世界の日本語教育』2号，pp.115–128.

横須賀柳子（2003）「ビジターセッション活動の意義とデザイン」，宮崎里司・ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育：ネウストプニーのインパクト』，明治書院，pp.335–352.